

わんちゃん、ねこちゃんの健康について、獣医さんから
専門的にお話しいたします！

わんにゃの健康最前線

「犬の腰痛にご用心〈パート2〉」



京都中央動物病院
院長 獣医師
村田 裕史 先生

前号に続いて今回もわんちゃんの椎間板ヘルニアについて述べたいと思います。実に様々な治療方法が存在する椎間板ヘルニア治療について正しい情報の考え方、具体的な治療法の選択ポイント、そしてなぜ予後が異なるのか？などのよくある疑問にお答えします。

治療

椎間板ヘルニアの治療方法は本当にたくさんあります。あるわんちゃんはサプリメントで経過が良好であるとか、あるわんちゃんは手術をしても麻痺が改善しなかったとか、インターネットを検索すると本当に様々な情報が出てきます。このような差はどこから出てくるのでしょうか？最初の注意点は、インターネット上の症例は本当に椎間板ヘルニアと診断されているのでしょうか？このような表現を用いているのも、残念ながらインターネットの情報は、しっかりと診断がされていない症例も相当数含まれているからです。前号のパート1で記載した診断ステップがなされていない場合、残念ながら誤診している可能性もあります。そのためそもそも治療方法や予後の比較はできないのです。次に、診断ステップがしっかりとおり、椎間板ヘルニアと診断がされている場合であっても、治療方法が色々あるのも事実です。これはパート1にも掲載しているグレード分類(表1)によって説明することができます。

グレード分類とは神経症状により分類されており、このグレード分類は椎間板ヘルニアによる脊髄圧迫の程度に関連があります。ここが椎間板ヘルニア治療の重要なポイントです。同じ椎

グレード	症状・神経学的異常	補足
グレードI	背部痛・神経学的な異常なし	歩行できる
グレードII	歩行可能な不全麻痺	なんとか歩行できる
グレードIII	歩行不可能な不全麻痺	歩けない
グレードIV	麻痺・深部痛覚あり	歩けないし、排尿もできない
グレードV	麻痺・深部痛覚なし	歩けないし、排尿もできない。痛覚も完全に消失。

(表1)

間板ヘルニアであっても、グレードが異なる→神経症状が異なる→圧迫の程度が異なる→治療方法が異なる。この流れを理解することが大切で、治療法の比較や選択は、①椎間板ヘルニアとの診断②グレード分類(圧迫程度の評価)の2点が重要です。

それでは、実際の治療方法の選択を説明していきます。グレード1〜2と軽度グレードは、内科治療として安静と薬剤を選択します。これは椎間板ヘルニアのグレードが軽度であれば内科療法と外科療法の治療の成績に差がないと報告があるためです。内科と外科どちらを選択しても90%以上改善が期待できるとされており、実際の自分の経験でも同様な傾向です。このため、通常は内科治療を選択することになります。この軽度のグレードに対する内科治療の期間としては、様々な期間が提唱されており、3週間〜6週間と報告によって幅があります。個人的には4週間つまり約1ヶ月と伝えることが多いです。この間は安静に保つように指示します。また、脊髄の炎症を取るために、NSAIDs(非ステロイド性消炎鎮痛剤)もしくはステロイド、ビタミン剤などが代表的な薬剤です。

グレードが上がってくると内科での治療成績が下がり、グレード3以上であると外科治療を行う機会が増えてきます。椎間板ヘルニアは椎間板物質が脊髄腔内に侵入し、脊髄の圧迫や炎症を生じることにより神経症状が発現するため、グレードが進行している場合、より重度に脊髄が圧迫されていることが予想されます。よって、外科手術で直接に椎間板物質(図1)を脊髄が



(図1)

圧迫されている部位から除去し、減圧することが、脊髄の機能回復→歩行機能などの改善へとつながるためです。

また、その他にも椎間板ヘルニアにはリハビリテーションと言われる理学療法も使用されます。このリハビリテーションは椎間板物質がまだ存在する急性期に実施すると、椎間板物質が脊髄を圧迫し、更なる脊髄ダメージを生じる可能性もあるため、適応タイミングと症例の選択が重要です。当院では外科手術で椎間板物質を除去した後、理学療法を実施し、神経機能の改善を目指しております。また、椎間板ヘルニアには他にも様々な治療方法が提唱されており、レーザー治療、鍼灸治療やサプリメント等報告が多数あります。これらの治療方法は従来から行われている内科療法や外科療法と比較し、治療に対するデータが少ないなど問題があることも。このような治療方法は、グレードが高い症例に単独で用いるにはややリスクが高いと言えるかもしれません。

椎間板ヘルニアの治療をまとめると、軽度なグレードであれば内科療法、進行したグレードであれば外科療法および内科療法にオアションとして理学療法を組み合わせて対応する形が一般的と考えられます。

予後

予後とは、その疾患の経過や結果はどのようになるかを示す言葉です。この椎間板ヘルニアの予後とはどうなるのでしょうか？治療の部分でも述べているのですが、軽いグレード1〜2であれば、内科療法あるいは外科療法どちらを実施しても90%以上の改善率とされています。通常

は内科治療を選択しますが、痛みが強い場合や再発の頻度が高い場合、外科治療を実施すると迅速な改善が期待できます。グレード3〜4では、外科療法が内科療法よりも成績が上回り、80%〜90%の回復率だと報告されております。このため、このグレード3〜4は、外科療法と内科療法を併用し、その他にも理学療法などの組み合わせることにより治療成績の改善を目指します。そして、最も重傷なグレード5はどのようなでしょうか？グレード1〜4までは、治療に対する反応はざっくりと行って80〜90%です。しかし、このグレード5の場合にはなかなか単純にはいきません。実は発症時間で反応率が異なるとの報告が存在しており、48時間以内に外科的に対応した場合、約半分程度の回復率(50%)、48時間以上経過した症例については、外科治療を実施してもほとんど回復しないと言われる報告や回復率が非常に低いとの報告が存在しております。このあたりは議論があるところではあります。が、外科治療を実施する時間が早い方が回復する可能性が高まることは間違いではないと思えます。この部分を読まれて気がつかれたと思います。

が、外科治療を実施しても回復しなかった症例は、グレード5であった可能性が高いです。このグレード5が椎間板ヘルニアの治療を非常にやっかいなものにしております。また、悩ましい問題としてグレード5の症例は、脊髄軟化症(後述)を伴っている可能性もあり、この場合、外科治療を実施したとしてもわんちゃんが死亡する可能性すらあり、治療を実施すべきか否か、非常に悩ましい選択となります。

終わりに

椎間板ヘルニアについて2回に渡り記載しました。様々な治療方法があり、反応も様々な理由が少し理解していただけたのではないかと思います。腰痛だけでは予後の問題がないことが多いのですが、腰痛であるグレード1から、次の日には、立てなくなってしまうグレード3〜4〜5と進行する例も決して珍しいものではありません。症状の変化に合わせて柔軟に治療戦略を変更していくことが大切なのがこの椎間板ヘルニアです。わんちゃんの腰痛には十分に注意してください。

特別コラム

「本当に怖い脊髄軟化症」

椎間板ヘルニアの予後を考えた場合、「脊髄軟化症」の存在を知ることが重要です。これは椎間板ヘルニアの全体からするとほんの数%の発症率ですが、より高いグレードになるとその発症率が高くなりグレード5であれば約20%のわんちゃんに発生するとの報告も存在します。この脊髄軟化症とは椎間板ヘルニアに関連し発生するのですが、正確なメカニズムについては未だに不明確です。提唱されているメカニズムとして椎間板ヘルニアになってしまったとき、脊髄を圧迫するだけでなく、

その周囲の血管系も圧迫されることで虚血や炎症が生じ、そこから炎症の連続でカスケード反応が生じることにより、脊髄の更なるダメージとなり、これらの一連の反応から脊髄の融解壊死が生じるとされています。この脊髄軟化症に対する有効な治療方法は現在、まだ確立されておりません。脊髄軟化症が進行し、近位の延髄まで広がると、呼吸が麻痺し、わんちゃんは呼吸困難により死亡してしまいます。だからこそ、グレード5になる前に対応することが重要です。

〈お問い合わせ〉
京都中央動物病院 電話 075-821-1020 京都市下京区柿本町582-3 9:00~20:00